生物科学系

<table>
<tr><td rowspan="2">教員数</td><td>教員等数
(人)</td><td>教授</td><td>助教授</td><td>講師</td><td>助手</td><td>技官〔準研〕</td></tr>
<tr><td></td><td>20
(19)</td><td>15
(16)</td><td>15
(15)</td><td>4
(4)</td><td>5
(6)</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td>異動状況
(人)</td><td>退職・転出</td><td>昇任</td><td>採用</td><td>学内</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td>5
(5)</td><td>3
(−)</td><td>4
(8)</td><td>−
(−)</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="9">研究活動</td><td rowspan="3">研究発表
(件)</td><td colspan="2">論文・著書発表数</td><td colspan="2">学会発表数</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">国内</td><td>国外</td><td>国内</td><td>国外</td></tr>
<tr><td colspan="2">54 (82)</td><td>179 (172)</td><td>218 (227)</td><td>58 (63)</td></tr>
<tr><td>受賞数(件)</td><td colspan="5">8 (4)</td></tr>
<tr><td rowspan="6">研究費等</td><td></td><td>採択件数</td><td>採択率(%)</td><td colspan="2">金額(千円)</td></tr>
<tr><td>科学研究費</td><td>29 (29)</td><td>40.3(37.2)</td><td colspan="2">347,412(313,400)</td></tr>
<tr><td>学内プロ</td><td>17 (15)</td><td>45.9(39.5)</td><td colspan="2">12,500(10,200)</td></tr>
<tr><td>奨学寄附金件数・金額</td><td colspan="4">11件 15,880千円 (5件 3,477千円)</td></tr>
<tr><td>受託研究件数・金額</td><td colspan="4">19件 158,429千円 (19件 119,109千円)</td></tr>
<tr><td>受託研究員</td><td colspan="4">1人 (1人)</td></tr>
<tr><td>施設・設備</td><td colspan="5"></td></tr>
</table>

・( ) は前年度の数値を示す。

1　生物科学系の活動

生物科学系は，本学のライフサイエンス関連組織のなかで，生物科学のコアとなる基礎領域の研究，教育を担っている。多様な生物群を多様な手法と視点で研究する広範な研究者を有する点に特徴をもつ組織であり，それぞれの分野で内外において相応の役割を果たしている。研究面：国内の雑誌に発表された論文が減少しているが，国外の雑誌への発表が増えており，全体として国際的なジャーナルを志向する傾向が増加している。科学研究費や奨学寄付金の取得も前年度に比べて増加しており，独法化後に向けた意識の向上がみられる。教育面：昨年度に引き続き学類オンラインジャーナルの刊行を行ったほか，学生による授業評価の実施，カリキュラムの検討を積極的に進めた。研究環境：研究スペースの再検討を行い，廊下の物品の撤去，リフレッシュルームの措置など，労働安全衛生法への対応を行った。

2　自己評価と課題

全体としては，研究，教育ともに活発であるが，活性の高くない教官も少なからずみられ，改革が必要である。人事面では，外部から公募で優秀な研究者を確保する一方で，優秀な教官の転出もあった。今後優秀な若手が転出しない魅力ある学系像の確立が急務である。また，学系全体の活性化を図る対策が必要である。

3　その他特記事項

学系構成員の受賞は８件であった。日本遺伝学会第57回BP賞（高橋教授，権田準研究員），講談社出版文化賞科学出版賞（林教授），三重県環境功労賞（渡邉守教授）日本神経発生学会賞（町田助教授），IEEE InfoVis 2003 Contest２位（伊藤講師），第３回朝日ビール地球環境科学研究賞（莫助手），日本動物学会賞女性研究者奨励OM賞（箕浦準研究員）